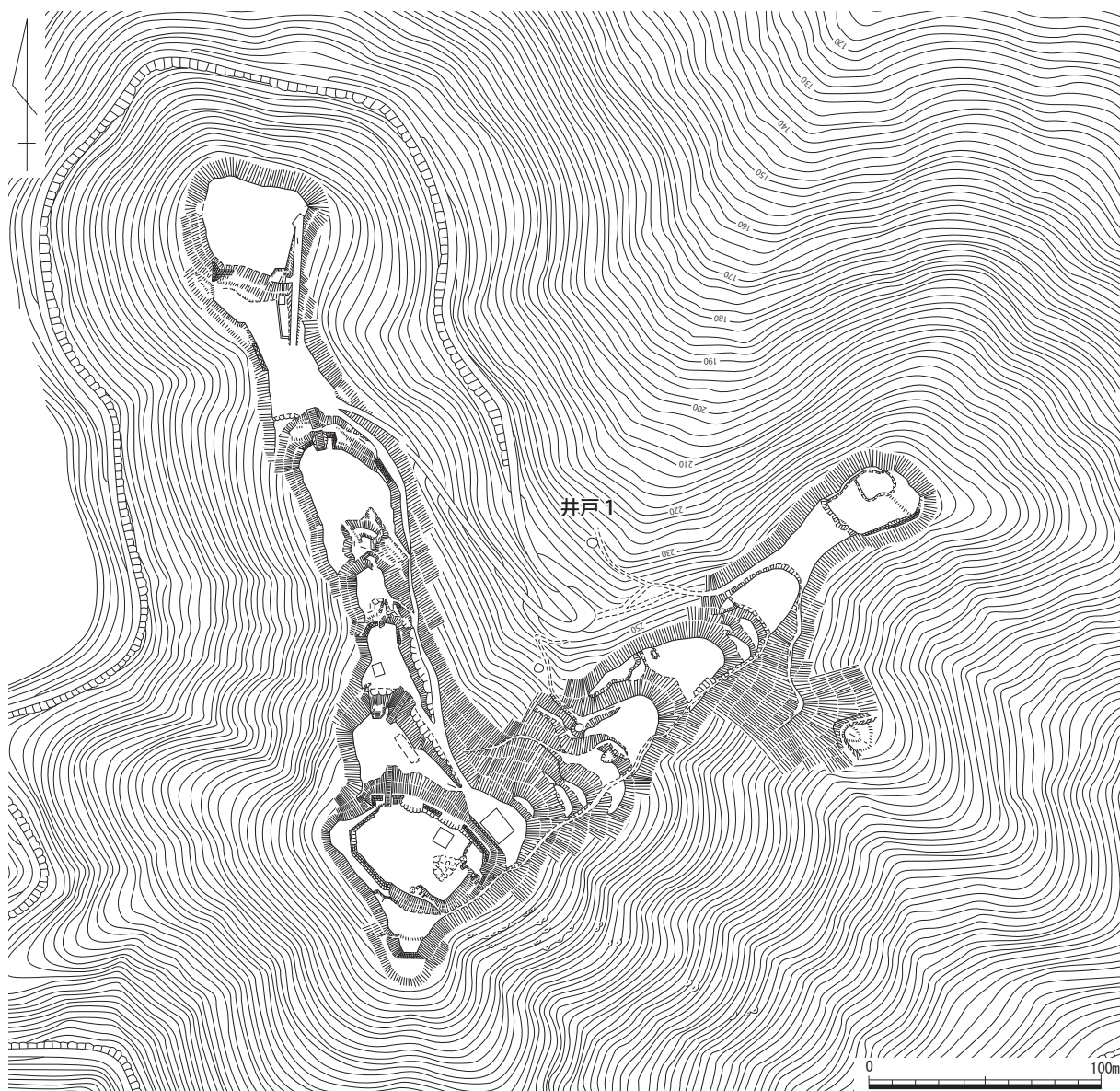


立地 城は、児島半島の中央部、旧児島湾を北方に見下ろす標高約 300 m の常山山頂に立地する。山頂からは、北の岡山平野を一望し、さらに南に目を向けると瀬戸内海や四国まで眺望する。約 2 km 東に麦飯山城跡、約 6 km 北東に両児山城跡が所在する。

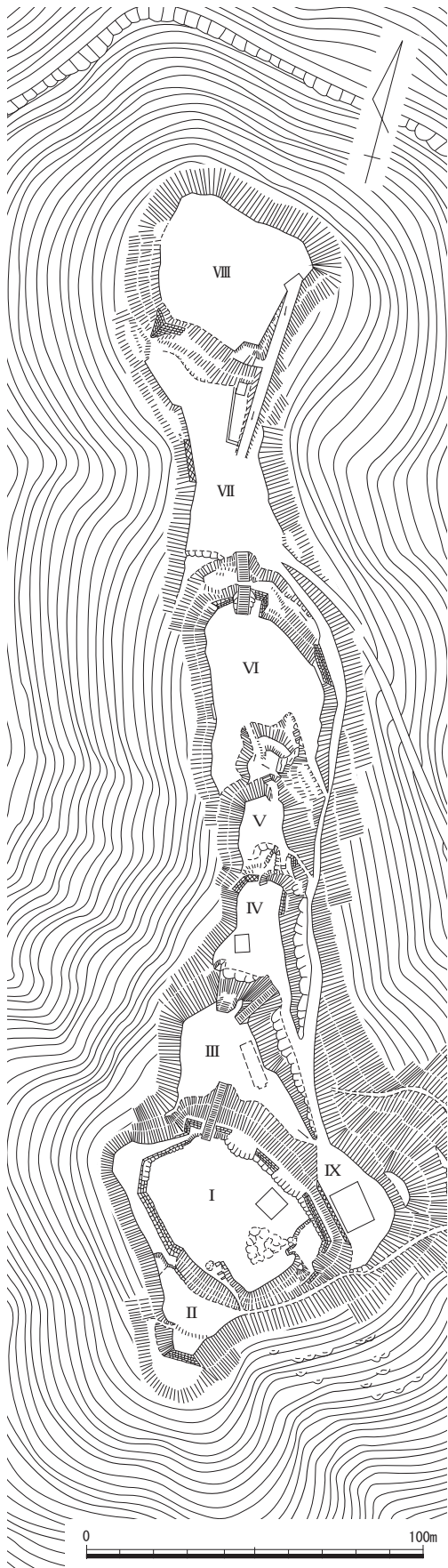
概要 常山山頂から北及び北東に「V」字を呈して延びる尾根筋に曲輪を連ねた連郭式の山城である。北に延びる尾根筋の曲輪群は駐車場・通信施設・石段等による改変が著しい一方で、北東に延びる尾根筋の曲輪群は曲輪Ⅸ（「東二の丸」と呼称）に無線中継所が建てられている以外は、大きな改変を受けていない。山頂に築いた曲輪Ⅰ（「本丸」と呼称）は、南東辺から南西辺東半以外を石垣で圍繞する。石垣は北西辺を除き高さ 2～3 m、8～9 段の野面積みを基本とし、屈曲箇所については算木積みを意識したような積み方が認められる。しかし、破城によるものか、石垣の天端石から 2～3 段目までが崩れ落ちている箇所や、石垣自体が存在しない場所もある。曲輪Ⅰ内は平坦に造成されているものの、南東側では地山の巨石が露出し、西側では古図で水をたたえたような表現がされている径約 10 m の穴が存在している。さらに東角には、8 m×9 m の方形を呈し、周囲より約 1 m 低い凹地が認められる。現在、曲輪Ⅰへ至る通路は、曲輪南角に取り付く曲輪Ⅱから続く通路と、曲輪北角にある曲輪Ⅲから構築されている石段があるが、これらは、前者が近代に保勝会が作ったもの、後者が 1937 年に建設されたものであるという。おそらく往時の通路は、凹地南角から南東に向かって約 3 m 下がり、そこから 90 度南西に向かって南東肩部に 2～3 段積みの石垣が 4 m 程続く幅約 1 m のものであったと考えられる。よって、この通路が取り付いている凹地は破城によって壊された内枳形虎口の残骸かもしれない。また、草木の繁茂のため現地では確認できなかったが、曲輪Ⅲから曲輪Ⅰへ至る通路は、曲輪Ⅲの南西端から曲輪Ⅰ北辺に設けた 3 方に石垣が築かれている突出部を経て、曲輪Ⅰ西側の犬走り状の平坦面に取り付くらしい。となれば、この突出部は横矢掛けを意識したものであろう。曲輪Ⅱの南辺には、13 段積みで高さ 4 m 以上の石垣が築かれている。曲輪Ⅲは、女軍の墓と石碑が建てられ、さらに北辺を曲輪Ⅳへの石段によって改変を受ける。曲輪Ⅳの北辺に認められる石垣は、終戦直後に築かれたものであるという。この曲輪の前面には、五輪塔が 1 基祀られている方形の小曲輪が設けられる。曲輪Ⅵ北辺には西半が後世の石段によって破壊されている石垣構築の櫓台、東辺中央部には現状で 13 段の野面積みの石垣が認められる。曲輪Ⅶは駐車場、曲輪Ⅷは無線中継所によって大規模に改変を受けるが、曲輪Ⅷ南西側に野面積みの石垣が一部残存している。無線中継所が建設されている曲輪Ⅸは、曲輪Ⅶから続くアスファルト道路が曲輪北端で取り付き、さらにその背面の崖面をコンクリート擁壁とするなど大きく改変を受ける。この無線中継所建設の際に当教育委員会によって 1979 年に発掘調査が行われており、調査区の西半で曲輪造成土が確認され、その上面から掘立柱建物 1 棟や配石土壇 2 基を検出している。出土遺物は軒丸瓦・軒平瓦・備前焼などで、軒平瓦には岡山城 2 式の瓦と同範関係にあるものも認められた（文献 248・249）。曲輪Ⅸから小曲輪を 3 面挟んで通称「東三の丸」と呼ばれる曲輪Ⅹに至るが、この曲輪の北端から曲輪Ⅲ・Ⅳ方向に向かう通路が所在する。この通路が往時のものであり、現在の曲輪Ⅹから曲輪Ⅰに続く山道は後世のものである。曲輪Ⅺの北端には井戸状の落ち込みがあるが、ここで売店を営んでいた人が天水を貯めるために掘ったものであるという。曲輪Ⅻ（通称「惣門二の丸」）には、石仏が並んでいる。曲輪ⅩⅣ（「惣

門丸)は、約60m×20mを測る大きさで、その南辺東端には高さ約1mで3～4段積みの石積み
が築かれる。また、北辺東半には土塁痕跡が認められる。この曲輪の南西端から南東斜面へ下る道が
あり、その先には堀切が所在する。

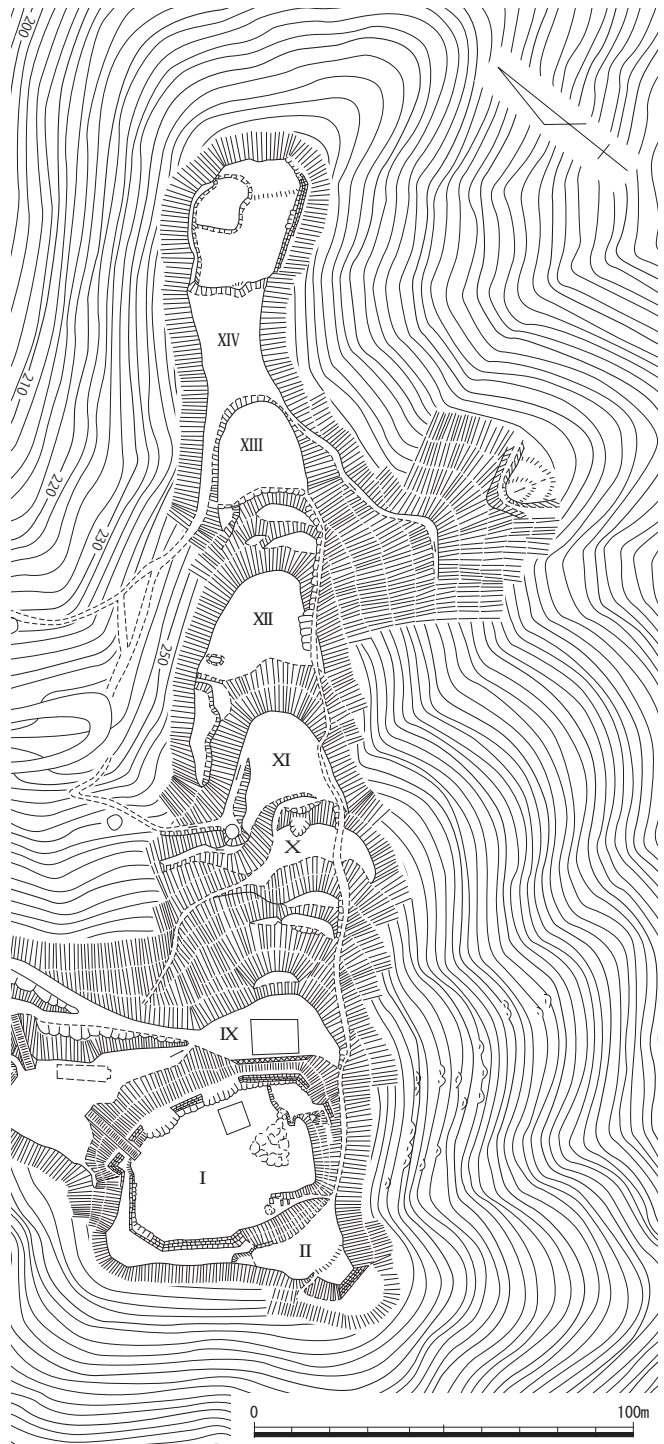
文献・伝承 応仁の乱頃に上野氏が築いたと伝わる。天正3(1575)年に起こった常山合戦では、
毛利氏に攻め込まれ、城主の上野隆徳は自害したと伝える。この合戦で、上野隆徳が家臣の「喜八」
の働きを褒めた書状が残されている(一次史料144)。以降、毛利氏が城番・城将を置いて支配して
おり、天正10(1582)年の八浜合戦の直前には、城の普請を命じるつもりであるという穂田元清の
書状が残されている(一次史料229)。天正11(1583)年の「中国国分け」によって、児島郡は宇
喜多領となり、宇喜多氏重臣の戸川氏が在城する。慶長4(1599)年の宇喜多家中騒動で戸川氏が
宇喜多氏から退散した後は、川端丹後守が在番する(一次史料275)。慶長5(1600)年の関ヶ原の
合戦後、備前国を領した小早川氏は、重臣の伊岐氏を城主とした(一次史料278)。小早川氏が慶長
8(1603)年に改易され、池田氏が備前国を治めると、廃城となった。(小嶋)



第181図 常山城跡縄張り図(1/3,000)



第 182 図 北尾根縄張り図
(1/2,000)



第 183 図 北東尾根縄張り図 (1/2,000)



写真 200 曲輪 I 南辺から郭内部を見る(南から)



写真 201 曲輪 I 柵形虎口? (西から)



写真 202 曲輪 I 南西石垣の隅角部 (南西から)



写真 203 曲輪 II 南辺の石垣 (南から)



写真 204 曲輪 XIV 石垣北側の隅角 (南東から)



写真 205 曲輪 VI 檜台 (北から)



写真 206 曲輪 VI 東辺石垣 (南東から)



写真 207 麦飯山城跡・両児山城跡を望む(南西から)